

<書 評>

「広岡浅子」を読む

軽 部 恵 子

2015年後期のNHK連続テレビ小説（略称「朝ドラ」）は、朝ドラ史上初めて、幕末から物語が始まる。主人公のモデルは、京都の豪商、出水三井家（後の小石川三井家）の出身で、17歳で大坂の両替屋、加島屋（かじまや）に嫁いだ広岡浅子（1849-1919）である。幕末・明治維新と環境が激変する中、嫁ぎ先の家業立て直しに奮闘し、炭鉱経営、大同生命の設立、そして日本女子大学の創設を実現した。自身が九転十起と呼ぶほど、波乱に満ちた人生を送った人である。

2014年度前期の朝ドラ「花子とアン」も評判を呼び、文学者の村岡花子、ひいては彼女の親友で、年下の男性と駆け落ちした歌人柳原白蓮（結婚後は宮崎燐子）が大いに注目された。しかし、今回の朝ドラは人気の裾野が遙かに広いようである。評者は電車の中で、男性が広岡浅子に関する書籍を読む場面を何度か見かけた。「女だてらに」と言われてもあきらめず、何とか勉強して、実業家として成功し、晩年は女性の教育に奔走した。浅子が現代に生き返ったら、朝ドラと自身の人気ぶりをどう思うであろうか。

脚本の基となったのは、古川智映子『小説土佐堀川：女性実業家・広岡浅子の生涯』（潮出版社）である。ドラマ放映に合わせて、新装改訂版が2015年2月に出版された。しかし、あくまでも小説であるため、本稿では取り上げない。

はじめに、ドラマの時代考証に関わった原口泉の『維新経済のヒロイン

広岡浅子の「九転十起」(海竜社, 2015年, 223頁)を紹介したい。原口は、1974年に東京大学文学部国史学科を卒業後、東京大学大学院人文社会科学部研究科に進み、1979年4月に鹿児島大学法文学部人文学科の助手となった。その後、鹿児島大学で教鞭を執り、2011年4月に志学館大学人間関係学部教授となった。著者の専門は薩摩藩の歴史だが、坂本龍馬に関する著作も多数ある。このほか、第13代将軍徳川家定の正室となった天璋院篤姫を主人公にしたNHK大河ドラマ『篤姫』(2008年)の時代考証を手がけた。

原口の本は口語体で書かれているが、各種の専門用語にはルビを振り、簡潔かつ正確な説明をつけている。それから、ドラマの背景として、洋学好きであった薩摩藩主島津斉彬から、ドラマで浅子に好意を抱く五代友厚、1867年のパリ万博と、実に幅広く取り上げている。浅子の生涯が明治期の経済と富国強兵政策を横糸にして、丁寧に説明する構成には、歴史学者としての真摯な姿勢が感じられる。

広岡浅子の生涯そのものを説明した書籍が複数出版されている。『広岡浅子の生涯』(別冊宝島2387号, 宝島社, 2015年, 111頁)は、「豊富な写真資料でたどる激動の人生」と銘打つとおり、浅子と浅子につらなる人々、風景の写真を駆使して、浅子の生涯と時代背景を解説する。評者にとって興味深かったのは、名門財閥の係累(42-48頁)、大同生命ビルを設計した「青い目の近江商人」ヴォーリズとの関係(49頁)、「明治期に活躍した女性たち」(50-55頁)、そして「女性の社会進出」(56-63頁)であった。これらを読むと、浅子の人脈と影響力が多方面にわたることを実感する。女性参政権運動の担い手として有名な市川房枝は、広岡浅子の別荘で開かれた勉強会に参加し、文学者として女性の地位向上に腐心していた村岡花子らと交流を持った。

広岡浅子を女性史の側面から深く学びたい人には、広岡浅子と女たち製作委員会『広岡浅子と女たち：幕末・明治・大正—新時代のヒロイン全集』(ファミマ・ドット・コム, 2015年, 111頁)を推したい。第2部「女たちの幕末戦記—時代の終わりと始まりを見つめて」では、浅子と直接交流を持っていた女性たちに限らず、幕末維新期に登場する歴史的人物を詳しく紹介する。

たとえば、2012年のNHK大河ドラマで主人公となった新島八重、江戸城無血開城に貢献した天璋院および和宮といった有名人はもとより、西郷イト（西郷隆盛の妻）、木戸松子（木戸孝允の妻）、高杉雅子（高杉晋作の妻）、坂本龍（坂本龍馬の妻）が貴重な写真とともに紹介されている。明治の女性について言えば、美人コンテストに兄がこっそり応募して退学処分された末広ヒロ子、洗い粉のポスター、横縞の水着姿の女性など、あまり目に触れる機会のない写真が掲載されている。柳原白蓮に至っては、7頁にわたりその生涯が紹介されている。

広岡浅子の生涯をさらに詳しく知りたい人には、主婦と生活社編『広岡浅子徹底ガイド：おてんば娘の「九転び十起き」の生涯』（主婦と生活社、2015年、110頁）を推奨したい。浅子の実家である三井家の系譜、嫁ぎ先の加島屋の系譜に始まり、関連する博物館、当時の古地図が紙面に配置されており、眺めるだけでも楽しい。浅子の姉、春が嫁いだ両替商の天王寺屋は、ドラマでも史実でも幕末維新期の混乱を乗り切れずに廃業した。春は1872年に25歳の若さで亡くなったが、本書の制作過程で天王寺屋を祖先に持つ人を探し出したという（32頁）。本書はまた、当時の女性の洋装（ローブモンタントなど）を解説し、浅子がそれらの衣装を実際に着た写真を掲載している。浅子は女性実業家として、格式高い装いで出席する会合が多かったと推察される。

『広岡浅子が生きた時代』（時空旅人別冊、プラネットライツ、2015年、111頁）も、興味深い。両替商の歴史を当時の浮世絵、店の番付などとともに解説するが、そのほかに「結婚と女性の生涯」、「開港と経済の混乱」、「炭鉱業の隆盛」、「石炭が支えた産業革命」等々、取り上げるテーマが幅広い。もちろん、女性の教育、浅子と同時代に活躍した女性たちの紹介も忘れない。

こうしてみると、歴史は1人の人物が作るのではないと改めて実感する。たとえば、女性の教育1つとっても、複数の書籍で紹介されている津田梅子以前に、浅子らたちがいわば地ならしをしていた。

また、幕末期の混乱と大商人の没落がなければ、才能あふれる女性たちが活躍する機会はなかったかもしれない。思い起こせば、欧米で女性参政権が

得られたのは、第1次世界大戦中、戦地に赴いた男性たちに代わり、軍需工場、電車の運転など、あらゆる分野で活躍した女性自身の力によるところが大きかった。戦争や戦乱で社会が崩壊を始めると、女性、少数者（マイノリティー）など、既得権を持たない人々が活躍できるようになるのは、歴史の皮肉である。

最後に、大同生命本社ホームページには、2014年から、広岡浅子に関する展示「大同生命の源流 鹿島屋と広岡浅子」が公開されている(<http://kajimaya-asako.daido-life.co.jp/>)。朝ドラの放送に合わせてさらに説明を充実させた。朝ドラを楽しむ視聴者はもちろん、幕末史や女性史を学ぶ人にとって、大変有意義な内容である。ぜひ参照してほしい。

(かるべ・けいこ／法学部教授／2015年12月22日受理)